



第4回 九州保育三団体研究大会 長崎大会

すべての人が、子どもと子育てに関わりをもつ社会の実現をめざして



つな
が
ろ
う
長
崎
で
。
語
り
合
お
う
明
日
の
保
育
を
。

- 開催日：平成29年7月19日(水)～21日(金)
- メイン会場：長崎ブリックホール
- 分科会会場：ホテルニュー長崎 他

主催：九州保育三団体協議会・九州社会福祉協議会連合会・社会福祉法人長崎県社会福祉協議会・一般社団法人長崎県保育協会
後援：厚生労働省・内閣府・長崎県・長崎市・社会福祉法人全国社会福祉協議会・全国保育協議会・全国保育士会・
社会福祉法人日本保育協会・公益社団法人全国私立保育園連盟

大会概要報告

九州というふるさとをもつ子ども達の未来の為に「つながろう 長崎で。語り合おう 明日の保育を。」を大会スローガンに掲げ、平成29年7月19日から21日の3日間にわたり1600名超の参加者のもと第4回九州保育三団体研究大会が開催されました。

1日目は記念式典に続き、基調講演では厚生労働省子ども家庭局保育課 課長補佐 坪井宏徳氏より「保育分野の現状と取組について」をテーマに、子ども子育て支援新制度から保育所職員処遇改善に至るまで説明をして頂きました。保育士会セミナーでは「新指針からよみとく保育の質」をテーマに、大阪総合保育大学 教授 大方美香氏より家庭内の環境の変化によって保護者の子育てに対する変化が子どもに大きく影響をしている現状や、新指針では未満児の教育、保育の部分が重要視されている事を講義して頂きました。

第2日目の分科会は5つのカテゴリーで8つの分科会と特別分科会を開催しました。第1から第8分科会は3か園、若しくは地区保育会の複数園合同での発表があり、地域に応じた取り組みなどに参加者からの質疑が積極的に行なわれたのが印象的でした。後半のグループ討議は更に活発な意見交換や質疑応答が行われ白熱した議論が展開されました。特別分科会は「これからの保育の在り方について」をテーマに行ないました。講師の万田康全国保育協議会会長より、現在の保育をとりまく状況から子ども子育て支援新制度に対する考え方について。大阪総合保育大学教授の大方美香氏より「保育所保育指針改定による組織のあり方について」と題し、新指針の講義で管理者向けの組織のあり方について。参議院議員ありむら治子氏より「少子化担当大臣を担って」と題し、自身の保育園の利用経験と、少子化担当大臣の経験の両面からの内容について、それぞれご講演頂きました。交流会では500名を越える参加者が集い、和華蘭料理に舌鼓を打ち、地元音楽家の市原隆靖氏によるライブショー、中国伝統文化川劇変面王の姜鵬氏による中国変面ショーを楽しみながら、交流を深めました。

第3日目の記念講演は、活水女子大学音楽学部特任教授 藤重佳久氏より「音楽は楽しく」をテーマに行なわれました。第1部は活水吹奏楽部によるブラスバンド演奏。第2部は藤重先生の経験に基づく指導者の立場からの講演内容で「音楽は自己表現であり音楽から何を伝えたいかを感じる事」など、保育に繋がる充実した内容の講演でした。第3部は大迫力のマーチングで素晴らしいパフォーマンスに感動が会場から伝わってきました。総会では前回大会の報告、大会宣言の採択が行われ、次期開催地、熊本市へ大会旗を引き継ぎ、大会の幕を閉じました。



(長崎県知事 中村 法道 氏)



(式典)

大会日程

第1日目

7月19日(水)

1. 式典

- (1) 開式の辞
- (2) 国歌斉唱
- (3) 保育関係物故者に対する黙祷
- (4) 児童憲章朗読
- (5) 主催者あいさつ
大会会長(九州保育三団体協議会会長) 佐藤 成己
長崎県社会福祉協議会会長 出口啓二郎
- (6) 開催県会長あいさつ
第4回九州保育三団体研究大会
実行委員長 西川 義文
- (7) 歓迎あいさつ
長崎県知事 中村 法道 氏
長崎市長 田上 富久 氏 (代理)
- (8) 来賓祝辞
全国保育協議会会長 万田 康 氏
日本保育協会理事長 大谷 泰夫 氏
全国私立保育園連盟会長 小林 公正 氏
- (9) 来賓紹介
- (10) 祝電披露
- (11) 表彰式
九州保育三団体協議会表彰 (41名)
九州社会福祉協議会連合会会長表彰 (144名)
- (12) 被表彰者代表謝辞
- (13) 花のおさなご斉唱
- (14) 閉式の辞



(佐藤 成己 九州保育三団体協議会会長)



(西川 義文 大会実行委員長)



(表 彰)

2. 基調講演(行政説明)

演題 「保育分野の現状と取組について」

講師 厚生労働省 子ども家庭局保育課 課長補佐 坪井 宏徳 氏

子ども・子育て支援新制度のポイント、地域型保育事業について、子ども子育て支援に必要な財源の確保について、平成29年度における社会保障の充実、保育所・幼稚園・認定こども園の利用状況、女性の就業率と保育所の利用者数の推移、保育所等利用待機児童数調査に関する検討会について、保育所の人材の確保について(年収、キャリアアップ等)、保育指針の改定について、等データを交え説明して頂きました。



3. 九州ブロック保育士会セミナー（長崎ブリックホール大ホール）

演題 「新指針からよみとく保育の質」

講師 大阪総合保育大学 児童保育学部学部長 教授
大阪総合保育大学大学院 教授 大方 美香 氏

梅雨明けを待ちわびていた空は次第に太陽も顔をのぞかせ、無事に初日を迎えることができました。「第4回九州保育三団体研究大会」が、長崎の地において、関係各位のご支援のもと、盛大に開催されましたことを、開催県として心より感謝申し上げます。また、第29回九州ブロック保育士会セミナーが680名を超える方々にご参加いただき深く感謝いたします。

さて、本セミナーにおいては犬童れい子九社連保育協議会保育士会会長に趣旨説明を、次に上村初美全国保育士会会長に全国保育士会の組織及び活動状況を報告していただきました。また、大会直前に起きた福岡、大分での豪雨災害についてもお話がありました。

本セミナーには、平成30年4月より告示される新保育所保育指針において、平成29年度を周知期間として定められていることを受け、大阪総合保育大学児童保育学部学部長教授兼同大学大学院教授であられる大方美香先生に「新指針からよみとく保育の質」というテーマでご講演いただきました。講演の中で「先生たちが行ってきた保育は、何も間違っていない。変える必要はありませんが、意識化、言語化が必要になっているのです」と新指針における乳児保育について次のように挙げられました。「身近な人と気持ちが通じ合う」「身近なものと関わり感性が育つ」「健やかに伸び伸びと育つ」これら3つの視点は5領域の元の種になります。そして、保育の振り返りをきっかけとし、保育指針を確認しながら次の10年後、20年後を考えていくことが今求められています。さらに、「遊び」を通して総合的な指導生活が大切であり、幼児教育については、社会や世界の状況を幅広く視野に入れ、教育課程を介してその目標を社会と共有していくことが重要視されています。また、保育の質については、今までの保育実践を見直しつつ、保育者の行動、言語刺激の量が子どもに大きな影響を与えていることを今一度確認し、つながりや気づくこと、そして言語化していくことが求められています。

1分という時間は「リスクの最大限の時間」と言われています。1分で考える力・習慣をつけることが質の向上につながるということを意識しなければなりません。

大人社会の変化が、常に子どもの生活に変化を与えているのです。

（報告者 長崎県保育協会保育士部会 部長 柴田月子）



分科会

【カテゴリー1】子どもの育ちを保障する

保育所の大きな役割は、子ども自身が自ら持っている発達する力を生かし、側面的に支援することとおして、その子どもの発達を保障することにあります。子どもの発達支援を中心に据えた保育を展開するために、質の高い保育について研究を深め、また、その保育を実践する人材の育成、研修の充実に取り組みます。

◆第1分科会 参加者315名

テーマ 新たな時代の保育実践～すべての子どもに向けて～

子ども・子育て関連3法の成立をはじめとする今日の保育をめぐる動きでは、保育の対象が「保育に欠ける」から「すべての子ども」へ広がる方向に検討されています。

また、幼児期の学校教育・保育、地域の子ども・子育て支援を総合的に推進するとの新法の趣旨から、認定こども園制度を改め、学校及び児童福祉施設としての法的位置づけをあわせ持つ類型も創設されようとしています。

保育所では、これまで保育所保育指針にもとづき、児童福祉施設として、各保育所における創意工夫のもと、保育実践をすすめてきました。

本テーマでは、上記実践のもと、子ども一人ひとりの健やかな育ちを保障し、保育の質を向上していくための手法や、さらに今後の保育をめぐる動きの中で大切にすべき保育実践の視点について研究を深めます。

座長	長崎県	星の子保育園	園長	辻本 恵津子
助言者	神戸大学	大学院人間発達環境学研究科	人間発達専攻	
			准教授	北野 幸子 氏
意見発表者	福岡県	名島保育園	主任保育士	伊藤 修平
	宮崎県	中央保育園（住吉南保育園）	保育士	山内 貴文
	鹿児島県	認定こども園つるみね保育園	主任保育士	武元 善輝
幹事	長崎県	あさひ保育園	園長	蒲原 大光
記録	長崎県	藤原幼児園	園長	山口 進太郎

1. 発表趣旨

(1)『子どもが自分の行動の主人公となる ～子ども自身で学びとる力を大切に～』

福岡県 名島保育園

子どもには大人と違い、子どもには時期に自身の成長発達に必要なものに応じた強い興味・関心もち、熱心に集中して取り組む時期がある。それが何なのか子どもを観察することから学び、子どもが自分で選択でき集中して取り組む活動をする自由を保障する。なぜそれが必要かという、気になる子どもには動きが激しい、反抗的、怒りっぽいなどの強い子ども、無気力、すぐ泣く、退屈する、依存的など弱い子ども、これを私たちは逸脱した状態の子どもと表現していますが、解決していくには「集中」した活動があらゆる問題を解決する鍵となっているのです。集中するためには自ら選んだものを「繰り返し」活動



することが必要です。ですが大人から「繰り返しなさい」というのではなく、満足するまで活動し、自分で終わることが大切。選ぶ力は0歳児からある。子どもの力を信じ「〇〇しなさい」よりも「AとBどちらにする？」という声かけをしていく。

園行事については、行事当日が子どもの結果、成果を披露する最終の場とならないようにしています。どうしても完成させてあげようという意識がでるが、その過程を大切にしたい。

（2）『新たな時代の保育実践 ～子どもの芽生えを大切に～』

宮崎県 中央保育園（住吉南保育園）

保育目標として「5つの約束の木」～「健康」元気な子ども、「人間関係」思いやりのある子ども、「表現」考える子ども、「環境」自分の事は自分でできる子ども、「言葉」挨拶や返事のできる子ども、この5つを卒園までにしっかりと身につくように保育しています。

年間行事について、病院とはデイサービスの利用者さんとの交流を中心に年間で計画を立てています。この他に年間を通しての活動で毎週月曜日の地域のゴミ拾い、園庭の花を育て生け花教室などの美化活動をしています。

保育の特徴として、0・1・2歳児は「温もり」をテーマとし、一人ひとりのリズムに合わせた保育に取り組み、子どもと保育士の愛着関係を築ける保育をしています。いつもそばにいる保育士が自分を受け容れる安心感が子ども達の情緒を安定させていると思います。食事や睡眠、排せつなど生活面で一对一で丁寧に関わる。保護者とも連携を取りながら子ども達にも無理なく対応できます。子ども達の様子を見ながら工夫を凝らし手作りおもちゃを提供しています。

3・4・5歳児は「心を繋ぐ」をテーマに異年齢児保育を取り入れ、相互に教え合い、共に育つことで思いやりが育ちます。3・4歳児と一緒に過ごすことで5歳児は様々なことにチャレンジします。少しずつ自信がついてきます。体験や経験については、本物に触れることを大切にしています。

保護者支援については、子育てを楽しんでもらうために、悩みを一緒に解決したり、話を聞いて気持ちを軽くできるように。また、子どもの育ちにおいて、今の状況を話し、関わり方を提案しています。



（3）『ハイブリッド保育 ～9割のアナログ保育と1割のデジタル保育～』

鹿児島県 認定こども園つるみね保育園

保育立案の際、アナログ保育に、「ほんの少しだけ」デジタル保育を加えている。

アナログ保育とは、豊富な園庭を利用した運動遊び。様々な楽器伴奏での音楽遊び。かごめかごめなど異年齢での交流。好奇心探求心を高めている科学遊び。散歩。自然豊かな環境での汗にまみれ、泥にまみれ、人にまみれる従来の保育。毎朝の集まり。5歳児が進行役を行う。行事でも担当する。2歳児から経験する機会があり、人前でも堂々と発表を楽しむ力が自然な形で育っている。

デジタル保育とは1台のiPad、それをプロジェクター、モニターで共有する等のデジタル機器を活用した保育。1回15分、週に1、2回というわずかな時間を発達段階に応じた内容で実践。

- （1）グローバルな感覚を磨く。テレビ電話で、県外や海外とライブ中継する活用
- （2）正しい知識を深める。毎月、調理担当者が、各地域の郷土料理を紹介する食育にもデジタルを活用
- （3）表現力・思考力・発表力を高める。4・5歳児が家庭の写真を使い、プレゼンテーション
- （4）道徳心や社会性を高める。自宅療養している園児とテレビ電話でつなぎ励ましの声かけなど
- （5）先進性・創造性を楽しむ。知育アプリや、ARアプリなどを活用する実践。先進的な技術に触れる

職務の効率化 指導計画、職員間の共通理解も正確で迅速に進むデジタル活用。保護者連絡等、アプリにより、欠席の連絡、お知らせ等が確実かつスムーズに。効率化により、時間的余裕があり、ゆったりとした気持ちで日々の保育に取り組むことができる。

この実践をとおして、子ども達の好奇心探求心が大きく育ってきていると実感できている。今後も、職員全員での実践を重ね続けることで、保育の質を向上させていきたい。過疎化が著しく進む地域だからこそ、伝統的な保育と先進的な保育をハイブリッドさせるというビジョンに挑み続け、新たな時代の保育を創造していきたい。

2. 個人ワーク・グループワーク

- (1) 子どもの主体性の尊重と、豊かな経験の保育保障のはざまで、先生自身の悩みや考えを省察してみて下さい
- (2) 発表を踏まえ、自園の環境構成について変えてみたいものを考えてみて下さい。
- (3) 発表を踏まえ、自園の行事について見直してみたいことを考えてみて下さい。
- (4) 以上のことをグループで意見交換をして下さい。



3. まとめ及び助言

神戸大学 大学院人間発達環境学研究科 人間発達専攻
准教授 北野 幸子 氏

行事に追われて、主体性を尊重した保育を理想としても、想像できないこと、保育士としての関わり方、余裕があれば、行事をどうとらえ、どう減らせば(保護者との関係等)などの会場からの意見があり、

北野先生からは、様々な分野の研究成果や、子どもにとってこの時期に本当にこの経験が必要か発達過程に応じた考え方。労働面からは、日本では「最低基準」という考え方から海外と比べて余裕がない。処遇改善など保育者に余裕ができて、一人ひとり対応できるようになった、などのデータをぜひ出してほしい。それが制度設計に繋がる。保護者に対しての援助、家庭保育と教育的意図を持った集団保育の違いなどの切り口から助言いただいた。

子どもの主体性を尊重する。その中で大事にされているのが、子どもに対する「洞察」だ。子どもの興味関心は何なのか、子どもにとって自明性があるのか。設定保育、子どもの体験どれもよいと思うが、大前提となるのが「子どもの発達理解」。大切なキーワードがありました。「逸脱」「個性」「自己選択」どうやったらできるのか。選択肢がないものに選択はできるのか。子どもが使いたくなる環境設定とは何か。興味を持つだろうかという「洞察」が大切。

最後に保育者にメッセージとして、「悩み続けてほしい」これでいいやと思ってしまうことの方が恐ろしい。現在脳科学をはじめとして様々な研究がなされているので参考にして下さい。子ども達は経験主義的に学びます。育ちには心が大切です。子ども達の育ちの特性として自明性、必然性があります。子ども達から洞察するのは。「子どもこそが評価者に」「教育的意図をもって」「変化を恐れなくて行動を」やってみただけ失敗だったというのはOKですよね。フレキシブルに、その都度その子どものためにやってみる。非認知的能力こそ乳幼児期にはぐくんでください。認知的能力は後からついてきます。



◆第2分科会 参加者255名

テーマ 配慮を必要とする子どもや家庭への支援に向けて

保育所においては、発達障害など配慮を必要とする子どもの増加が指摘されてきています。保護者自身が生活面など何らかの課題を持ち、子育てに困難が生じるケースも増えています。

本テーマでは、こうした子どもや保護者に対する保育所としてのかかわり方、あるいは保育従事者としていかに寄り添い、支援をおこなうべきかについて、研究を深めます。

座長	長崎県	山里平和保育園	園長	谷	ゆりか
助言者	長崎大学	大学院医歯薬学総合研究科	教授	岩永	竜一郎 氏
意見発表者	大分県	竜東保育園	保育士	衛藤	エミ
	宮崎県	鳴峰保育園	主任保育士	中島	里美
	沖縄県	みどり保育園	主任保育士	仲間	涼子
			保育士	甲田	和美
幹事	長崎県	みなと保育園	園長	渡邊	さくら
記録	長崎県	須川保育園	園長	松尾	康史

1. 発表趣旨

(1)『配慮を必要とする子どもや家庭への支援にむけて』

～児童票の発達記録を用いて子ども、保護者、園との協働支援を目指して～』

大分県 宇佐市立竜東保育園

【研究の動機ねらい】

- ・多様な事例や視点から、子どもを捉えよう。
- ・保護者が周囲との関りが少なく、子育ての不安を抱えていたり、自分の子どもしか見えていなかったりという状況がある。
- ・家庭や保護者の考え方、関わり方、保護者が、子どもの発達をどう捉えているか。また、どのような成長を期待しているのかを知る。
- ・子どもにあった支援の在り方を考える。

【研究内容】

- ・配慮を必要とする子どもを中心に、子どもの実態、保育の実践記録を持ち寄り、4園で共同研究を行う。
- ・児童票の発達記録を用いて、保護者に2回のアンケート調査。あわせて、家庭生活のアンケート調査も実施。



【結果及び考察】

- ・ 2回のアンケートを通して、保護者が年齢相応の成長に気づけた。
- ・ 集団生活（園での）で身につく力の再確認ができた。
- ・ 保護者と保育者により、見解のギャップがみられる。特に、人間関係の項目における差が大きかった。つまり、親からは見えにくい部分があることが推測される。

【助言】

見解のギャップについて理由として考えられるのが、心配だけど否定したい思いがあったり、園と家庭では子どもの様子が違ったりといったことが考えられる。

保護者への伝え方と言う点で、普段の保育の中で、保護者と子どもの様子について共通理解をしている事は、伝えにくいことや、伝わりにくいことが保護者にとってわかりやすくなる点で有効である。



（２）『子どもの育ちを保障する ～配慮を必要とする子どもや家庭への支援に向けて～』

宮崎県 鳴峰保育園

【研究の動機ねらい】

人的・物的環境、専門機関との連携などを通して、配慮の必要な子どもや家庭の支援の課題を明らかにし、今後の展望について考える。

【研究内容】

子どもの様子、環境から指導の手立てと配慮事項を「個別支援保育計画並びに児童票」を作成し、計画、記録する。

専門機関との連携を図りながら、機会を見て、保護者を専門機関への利用へと導く。



【結果及び考察】

成長の共有、考え方を認めることを通し、保護者との信頼関係が強まることにより、子どもの様子にも、良い変化が見られた。

保護者への支援を担当(担任)だけでなく、他の職員や園長など、第三者が加わることで専門機関への導きもスムーズにできた。

【助言】

適切な時期に専門機関と連携することで、保護者の安心にもつながり、さらには園での支援へとつながっている。

全体計画では不足するので、個別計画は非常に重要である。

保護者との信頼関係を結ぶため、どのような言葉かけや、考え方が必要か助言があった。



(3)『親の思い・保育士の思い そのすれ違いからみえてくる保育士の葛藤』

沖縄県 みどり保育園

【研究の動機ねらい】

保育を振り返り、課題を明らかにする。

保育観や大事にしたいことを職員全体で話し合い、深め、確認し合う機会とする。



【研究内容】

対象児と担任の関わりの中での、悩みや葛藤をもとに、子どもと母親と、どう向き合っていくのか、園全体で協力しながら解決していく。

【結果及び考察】

普段の悩みを担当がひとりで抱え込まないようにするための様々な工夫を行う。

仲間同士で支え合う場を作り出すための工夫や、保育士がゆとりを持って仕事ができる環境作りの重要性を感じた。

【助言】

保育者がどうしていいかわからなくなったり、保護者との関係が悪化したりすると、どんどん辛くなってしまう。そこは担任だけでなく全体で支えることが必要であり、園外の第三者(専門機関等)に関わってもらうことも有効である。



◆第3分科会 参加者200名

テーマ 保育者の資質向上を図る

保育所における今日の状況として、就業形態や雇用形態の多様化の進展があげられます。そのため、職員間の連携、チームワークの形成や、職場全体としてのスキルアップに一層留意する必要があります。

また、保育をめぐる新たな制度も見すえた流れのなかで、今後保育利用者のいっそうの多様化が進むことが想定されます。

本テーマでは、保育所内外の研修や情報共有のあり方、保育士の自己評価など、保育所職員の資質向上に向けた効果的な実践、さらには今後保育従事者に求められる資質向上のあり方について研究を深めます。

座 長	長崎県	清華こども園	園長	蒲池 房子
助言者	活水女子大学	健康生活学部子ども学科准教授	重成 久美 氏	
意見発表者	福岡県	鯉田保育園（あじさい保育園）園長	高橋 智子	
	大分県	東舞鶴保育園	主任保育士	高田 久美
	沖縄県	天久保育所	保育士	岸本 ひとみ
幹 事	長崎県	上志佐保育所	所長	三木 和枝
記 録	長崎県	八斗木保育園	園長	福島 真砂

1. 発表趣旨

(1)『一人ひとりを大切に保育する～保育者の質の向上を図る～』

福岡県 鯉田保育園（あじさい保育園）

【動機・ねらい】

設立当初より0～5歳児に於いて一斉保育を行って来たが、落ち着かないその様子を長時間を園で過ごす子ども一人ひとりともっと向き合い、子どもが主体的に、また安心して生活できる保育を目指したいと保育の見直しを行った。

【研究内容】

テレビ任せの保育からの脱却（絵本の読み聞かせ、手遊び等子どもと保育者が向き合う保育）専門的見地からの布おむつによる保育、0～1,2歳児の「担当制」等。特に担当制においては外部講師を招いての園内研修や他園の見学等、研修、研究を重ねて「あじさい保育園の育児担当制」が生まれ、法人全園で取り組みを行っている。

【結果及び考察】

子どもへの関わり方を変えて行った事で、一人ひとりに丁寧にしっかりと向き合う事が出来る様になり、保育者との信頼関係や大人に対する愛着が形成されていった。それによって子ども達も落ち着きを見せるようになる。また、子どもが主体である様にと心がける事により、それぞれ保育者が「保育」と向き合い、その質をもっと高めたいと言う意欲に繋がっている。

【助言】

保育の取り組みにおいて、その方法だけでなく、何の為に、子どもにとってどんな意味が

あるのかを明確にする事が大切で、それを踏まえて実践に移そうとされている所に感銘している。研修は常に自ら主体的に学ぼうと言う意欲、共に高め合う事が大変重要である。

【質疑応答】

Q 担当制において、保育士1人に対して子どもの担当人数は？

また、短時間の保育士が担当になった場合の対処は？

A 担当の人数はクラスの人数、子どもの状態、保育士のキャリアによって様々。短時間保育士が担当の場合、引継ぎの連絡や他の保育士との連携を密に行う様に心掛けている。

Q 日課のある生活とは？

A それぞれの家庭での生活リズムを知り、それを踏まえて園生活を行う。そうする事により子ども自身が次の行動を予測し、主体的に行動する様になる。

（２）『保育の「見える化」を通して変化した保育者の意識と実践』

大分県 東舞鶴保育園

【動機・ねらい】

今年、設立37年目を迎えた東舞鶴保育園。「子どもが幸せになる保育」を目指し、保護者と共に学び合いながら日々保育を実践している。しかしながら、保育そのものが保護者に上手く伝わらず共通理解が出来ていないのではないかと考える所から「見える化」の充実を図る。また園全体での意識統一の為、子どもや職員間に対しての「見える化」も行い、より質の高い保育を目標とする。

【研究内容】

行っている内容（園、クラスだより、掲示物、連絡帳等）の検討。各クラスの掲示では、行事の時だけでなく日常の様子を写真等でほぼ毎日掲示して、日々の保育がより明確に伝わる様に工夫。また、子どもに対しては生活の流れを絵や図で分かりやすく知らせ、職員間の連絡事項もボードの利用、月案や週案の詳細化を行った。



【結果及び考察】

「見える化」に取り組み1年後、保護者に対してのアンケートを行った結果、殆どの保護者が園に対して安心感は抱いているが、保護者が理解する内容と保育者の伝えたい思いに食い違いがある事も分かった。しかし「見える化」を行う事で、保護者と保育者、子どもと保育者、保育者同士のコミュニケーションが増え、絆は深まったと言える。また、発信する側も受け手側もお互いの立場に立って考える事の大切さを改めて認識する結果となった。今後も更なる工夫を続け、保育の質の向上に繋げて行きたい。

【質疑応答】

Q 毎日の園生活を写真で掲示する際、決められた担当者がいるのか、

また、作成の時間の確保は？

A 午睡時にそれぞれのクラスの担任（複数担任）が作成している。

Q 写真を載せる際の留意点は？

A 保護者への配慮を考慮し、偏りのない様に気を付けている。

【助言】

「見える化」が保護者だけに留まらず、子どもや職員に対しても応用されている所やそれによって保護者、職員の意識の変化がはっきりと映し出されている研究の成果が大変素晴らしかった。また、園の掲げるスローガンが印象的で、これも一つの「見える化」であり、自分自身を律する上でとても大切である。

スローガン「日本一学ぶ職員集団・相手の心に寄り添う職員集団・24時間365日笑顔」

(3)『保護者支援を通して保育者の資質向上を図る

～保護者と共感し合い、子どもの育ちを支える保育者を目指して～』

沖縄県 天久保育所

【動機・ねらい】

本園は那覇市で唯一の幼稚園との一体施設「あめくみらい幼保園」として、本年5周年を迎えた。0～5歳児までの連続した発達を見通し、一人ひとりの子どもの育ちを支える保育に日々取り組んでいるが、近年、子育てを取り巻く環境の変化に伴いその保護者を支える保育の専門職としての更なるスキルアップが求められている。

【研究内容】

保護者への伝達方法についてのグループ討議、個人面談の持ち方を考える為のロールプレイ演習、子育てアンケートの実施に於いては親子の状況をより把握出来る様、内容の検討を行い「子育て情報だより」を作成し、保護者の悩みに合致する内容や様々な情報を発信。

【結果】

保護者との繋がりを意識したそれぞれの研究の結果、保護者からの理解を得る事が出来、保育者の子どもへの積極的な関わりや子どもの生き生きとした様子を具体的に伝える事で保護者との信頼関係が深まり、それを実感する事で保育に対する意欲が益々高まりを見せている。

【助言】

個人面談の演習にロールプレイを取り入れるのは、リアリティーをもって学ぶ為のツールとして非常に効果的な方法である。保護者支援について考える中で保育の質も相互的に高まっている所が印象に残った。

【質疑応答】

Q 保護者との個人面談はどの様にして決めているのか、また年に何回程度？

A 表を作り保護者に希望を記入してもらい、それを参考にして決定する。

5月、11月の年2回、午睡時を利用して20分程度の時間枠で行っている。

Q ロールプレイはどの様に展開されているのか？

家庭環境等子どものおかれている状況を仮定した上で保育者を保護者に見立て展開。

その他の保育士が意見や感想を述べる。

2. グループ討議

●保育の「見える化」

- ・ホームページやドキュメンテーションの利用。情報発信には一般的で分かり易いが一方的である為、観る側の思いや意見の「見える化」も今後の課題
- ・毎日の給食をケースに入れて保護者が見ることができる様にする。連絡帳に一日の様子を詳しく記載して伝える。
- ・個人懇談会、一日の様子をスライドショーにて玄関に掲示

●保育士同士の見える化

- ・園内の各クラス、また同じ保育方針（見守る保育等）の園同士で保育士が入れ替わりそれぞれのクラスの様子を見る。
- ・保育中の様子をビデオに撮り研修にて振り返る。
- ・朝礼、昼礼、午睡時を利用して意見交換、情報の共有を行う。

●一人ひとりに寄り添う

- ・担当制
- ・子ども一人ひとりに合わせた食事の量の調節
- ・発達の遅れた子どもへの言葉かけや集団へ馴染めない子どもへの対処等
- ・全体の共通理解として認識し協力し合う（園児管理システム等の利用）

●特色のある資質向上の取り組み

- ・定期的なチェックリストによる自己評価。
- ・キャリアに差のある保育士同士による複数担任。
- ・海外研修

*これらの意見は全て各園で実践されているものです。



3. まとめ・助言

活水女子大学 健康生活学部子ども学科准教授 重成 久美 氏

保育所保育指針の改定により、保育所は「幼児教育を行う施設」と明記され保育者の更なる質の向上が求められている。何故「質」が求められるのか。「OECD 保育白書」の中にも「人生の始まりこそ力強く」と掲げられている様に、幼児期（特に0,1,2歳）がその後の子どもの成長やその国の将来に大きく影響するものと捉えられているからである。保育の質は、プロセス（保育実践そのもの）、条件（子どもの人数、保育者の経験年数等）、労働環境（給与、仕事への満足度等）、これらの質のバランスが大切であり保育者一人ひとりの倫理観、人間性、責任の理解と自覚を基盤とし、保育者同士の共通理解、協調性を高め、信頼関係の中で常に自己研鑽に励み、主体的に資質向上に努めなければならない。

保育の質を高める為の具体的な方法のひとつであるドキュメンテーション等で日々の園生活を「可視化」し、子どもの育ちや実践の過程を振り返る。また、何より大切なのは、職員間で「保育」を語り合う時間を多く持ち、共感的に関わり合いながら評価と探究を行う事。子ども一人ひとりと丁寧にに関わり、喜びや意欲を持って明日からの保育に臨んでほしい。

【カテゴリー2】子育てライフを支援する

子どもが心身ともに豊かに成長するためには、子どもと家庭を一体的に捉えて、その家庭を支援することが必要です。保育所は、多様化する働き方と子育て家庭のニーズに応えるための機能を充実し、子育て支援の拠点として、すべての子育て家庭を対象とした支援を展開します。

◆第4分科会 参加者112名

テーマ 地域の子育て家庭への支援の充実に向けて

保育所保育指針においては、保育所の役割として、保護者に対する支援と地域における子育て支援が明確に位置づけられています。

一方で地域のつながりが弱まるなか、子育てに孤立感や孤独感を深めている家庭へのアプローチが、とくに重要な取り組みとなっています。

本テーマでは、地域子育て支援における保育所の役割や、保育従事者に求められる知識や技術の習得、保育所の持つ機能をいかに地域支援に活かしていくかなど、地域の子育て家庭に対する支援のあり方について、研究を深めます。

座 長	長崎県	小迎保育園	園長	谷口 剛
助言者	長崎県教育委員会委員・元長崎女子短期大学			
			学長	浦川 末子 氏
意見発表者	沖縄県	ほるとのき保育園	主任保育士	照屋 昌美
			保育士	國仲 恵利子
	大分県	豊川こども園	主幹保育教諭	安倍 正子
	佐賀県	かわのぼり保育園	主任保育士	古賀 麻子
		志久慈音保育園	主任保育士	松本 恵子
幹 事	長崎県	小鳩保育園	園長	宮崎 トシ子
記 録	長崎県	津吉保育所	所長	村上 智恵子

1. 発表趣旨

(1)『親と共に育つ子育て家庭への支援について

～保育園と子育て支援センターの役割について～』

沖縄県 ほるとのき保育園

【研究の動機・ねらい】

近年の核家族化、地域のつながりの希薄化、保護者の長時間労働などにより、子育ての孤立、不安・負担感、子どもとの関わりの減少が課題となっている。そこで地域支援の足取りを振り返るとともに、専門性を活かした保護者支援を模索するために研究に取り組んだ。

【研究内容】

保育園、子育て支援センターへ向けた「地域子育て家庭の支援の充実に向けてのニーズ調査」の結果をもとに支援方法を職員間で話し合い、保護者同士の情報共有の場を持てるよう、

環境づくりを行った。さらにアンケート結果を保護者に提示して見本にしてみようなど広報活動、情報発信などを行った。

【結果考察】

悩みの原因は周りの環境だけでなく、子育てに対する個々の考え方や感じ方の違いも要因のひとつということがわかった。また、情報発信した結果、共感を持って、安心感を得たとの声があった。有効な時間の使い方、ストレス発散方法を知り、子育てを楽しく感じることが出来たようだ。しかし、一人では解決できない方もいる。子育てに不安を抱く方を応援できるコミュニティづくりが大切。子どもの最善の利益を保証し、保護者のがんばりを認める。地域の中で、保育士、子ども、保護者が高め合うサイクルを造ることが大切である。

【課題】

①コミュニケーションを苦手とする家庭へのアプローチの仕方 ②職員全体でそれぞれの家庭への支援を行う ③保育所職員の専門性を生かした情報の提供 ④支援必要な子どもの早期発見・早期療育をめざし不安や悩みを持つ家庭との密な関わりをもち関連機関との連携を取る窓口となる。

【助言】

ニーズ調査を実施し、結果から導き出された内容に感銘を受けた。今後の課題にも同感。結果をさらに深めるために、研究の面から一言。①意思疎通を苦手とする家庭に「こういう取り組みをしたら、意思疎通が高まるのではないか」という具体的な方法（笑顔で、先にあいさつ、声掛け、子どもの良さの情報提供）を仮説とする。②③は「個別の家庭支援のために職員全体でこんなことに取組もう」という手だてが欲しい。支援を求めている家庭の実態把握をし、その方法を見つけるための事例研究をすすめる。具体的な支援策を実施していく中で細やかな支援や個別支援が見え、さらに専門機関へつなぐ事例が明らかになってくる。その結果実現した素晴らしい保育を、保育者養成大学と連携して学会で発表してほしい。保育者も保育学会などに入って研究するという道筋をつけてほしい。

(2)『地域の子育て家庭への支援の充実に向けて』

～家庭訪問型子育て支援事業を通して「切れ目ない支援」の実践～

大分県 豊川こども園

【研究の動機・ねらい】

時代と共に変化する子育て環境の中で、地域につながりにくい親子を支え、楽しみながら子育てができるような支援に取り組んでいる。親子を家庭から地域へ切れ目なくつなげるために、関連機関と連携しながら「待つ支援」から「届ける支援」、気軽に相談できる相手として、個別に寄り添い孤立感の軽減と「子育てが楽しい」と感じることができる安心、安全な支援として、制度間の隙間を埋める活動である“ホームスタート”の活動を行っている。



【研究内容】

2012年からの約4年間の利用者15名を対象に、申込みから世話人の訪問、ビジターのマッチング、約4回の訪問、世話人によるモニタリング訪問、最終評価を行った。

【結果考察】

事例の内容や、アンケート結果から、訪問依頼を受けた世話人が、利用者の訪問前の気持ちや思いを傾聴し、ビジターの訪問の後、少しずつ気持ちが変化し、心理的安定が得られ充

足していった様子がうかがわれた。また「困ったときはいつでも利用できる、頼れるところがある」という安心感、地域の専門職の支援以外に、気軽に利用できる相手、親子を地域へ切れ目なくつなげる有意義な活動としてホームスタートの役割があることがわかった。

【課題】

専門職による支援とボランティアによる支援が相互に理解し、協力し合う関係づくりを行うことは、利用者に安心して気軽に利用してもらうことにつながる。このように地域の関連機関と連携することで、一組の親子にたくさんの目が行き届くことになる。たくさんの選択肢のなかで、必要に応じた資源があること、自分の意向に合う相手を選んでつながっていくことが望まれ、親本来の力をエンパワメントすることにもつながる。

【助言】

「子育て満足度日本一」を目指す大分県で、思いの深い NPO 法人の取り組みが県に評価され、連携して家庭訪問型の支援事業に取り組んだこと、また最前線の保育園が自主事業で実践された取り組みを評価したい。「拠点まで出ていけない家庭」に「届ける支援即ちアウトリーチ」を「限られた財源の中でどこまでやるか」という課題はなかなか手つかずの部分。訪問による情報提供と「傾聴」は大変重要。伴走型付き添い支援による「協働」により、孤立感の解消や地域とのつながりを目指すと発表されたように、拠点型子育て支援事業と訪問型子育て支援事業が連携をしながら、切れ目・隙間のない総合的支援がさらに実現されていくことを期待したい。国も新しい子育て安心プランに「寄り添う支援」を盛り込み「保育コンシェルジュ」の出張相談を計画している。支え合う地域社会を創っていく上で「アウトリーチ」がキーワードになっていくと思う。

(3)『地域の子育て家庭への支援の充実に向けて～多様な子育て環境への挑戦～』

佐賀県 かわのぼり保育園、志久慈音保育園（武雄市保育部会）

【研究の動機・ねらい】

地域への子育て支援が保育の専門性を発揮するチャンスとして、関連機関と連携した支援を行ってきた。しかし、多様化する社会環境の中で、今、必要な子育て支援とは、保育の専門性をどう生かしていくか、また地域で求められる保育園の役割とは何かを深めるため、武雄市保育部会は関係機関と連携したさまざまな支援に取り組むことにした。

【研究内容】

- I 園における子育て支援…各園が共通の視点を持って保育を行った事例の研究。
- II 地域における子育て支援…地域とのつながりの再構築をめざした3世代交流。
- III 関係機関との連携…“たけお子どもフェスタ”の取り組み。

【結果考察】

- I 保育者の資質向上が、保護者の思いを共有することにつながる。
- II 地域を知り、顔が見える関係づくりから始めることが必要。こちらの思いを伝えると同様に相手のありのままを受け入れることが、人間関係構築の第一歩。
- III 専門性を生かした言葉かけと保育所だけでは気づかない多様な視点を活かして、新たなつながりを持ち、次へと広げていく。保育者の資質向上、保護者の学びの場が子育て支援の豊かな土壌を育むことになる。

【課題】

保育所が気軽に利用できる子育て支援の場として、継続的な発信が求められる。誰もが子育て支援にかかわるきっかけとなるように地域を巻き込み、豊かな対話で思いをつなぎ、誰もが子どもと一緒に成長できる地域社会に貢献することが、保育所の役割と考える。多様化

する子育て環境の中で、この活動がどのような効果をもたらすかを深め発信していきたい。

【助言】

市全体の保育園が連携して親を支える取り組みは素晴らしい。どこでも安心して支援が受けられる仕組みこそ市民の願い、正に先駆的。親を安心させ、元気にすることが一番の子育て支援。安心と信頼を提供できる保育者に出会えることを親たちは待ち望んでいる。一人ひとりの保育者が「信頼関係」を結べば、親の感情が安定し、子どもの情緒も安定してくる。子どもの幸福のために親を支えるのがプロの保育者だ。一層保育者の質が求められる。市には研修に関する体制整備もできているかと思うが、各園に研修担当者を位置づけ、体系的・計画的な取り組みにして頂ければと思う。研究主題を検証・解明しながら問題解決の手法を身につけていくことで職員全体が育つ。



2. 質疑応答

Q1 (佐賀県) ほるとのとき保育園の“まぶやサークル”が盛り上がり、保護者の皆さんが学区を超えて小学校に進学しても活動が続いていることが理想的。どういうことを行っているか教えてほしい。

A1 (大分県) 大分が多いのは、ホームスタートが施行のとき、ホームスタート“やしの実”さんが、地域に広げたいと市の方に熱心にアプローチをし、大分県がバックアップ。県から市の方へ働きかけがあり、県知事のアウトリーチへの理解と後押しもあり、少しずつ広がっている。今では大分が見本になり、見学も来ている。県内では会議が行われ関連機関が集まっている。

Q1 (大分県) ホームスタートをしているが、市の方から支援を要請されて行くことが多い。専用の電話があるが、自分の方からかけてくる人は少ない。パンフレットを置いているが、ほかに工夫を知りたい。

A1 (大分県) あくまでも母の意思なので、待つことが多い。助産師の協力もあり、地域に常に発信していくことが大事。電話をかけてきた勇気を大切に。電話で話すことで悩みは半減しているようだ。すぐに訪問することを心がけている。保健師などとのつながりを大切にしながら、とにかくアプローチを待っている。

3. 討議

討議テーマ「自園でやれるこれからの子育て支援とは」

- ・広報活動（HP、園便り、クラス便り、掲示板、チラシなど）で外部への発信が必要。情報を知らない人も多く参加者が少ないことがある。行政への発信と協力も必要になる。
- ・保育をしながらの支援は手が回らないこともある。人的環境を整えた上での活動が必要。地域や園によって職員の環境に差もあり、担当保育士の有無も。他園との協力も有効では。
- ・支援しても入所に至らないこともある。保護者はスマホに夢中で子との関わりが希薄。声掛けが課題だが、保育士の話し方、タイミングが難しい。保育士の資質向上、保護者との信頼関係の構築など、職員のスキルアップで保育所の専門性の向上につながる。
- ・一時・休日保育などで声かけを行い、また来たいという気持ちを持ってもらうきっかけとなる。反面、知らない人が利用することがあるので、信頼関係の構築が難しかったり、自園保育に支障があったりすることもある。園の保護者、未就園児保護者に意識の相違あり。ひとそれぞれの背景をどうとらえるか、保育士のスキル向上のために学ばなければ。

◆第5分科会 参加者144名

テーマ 家庭や地域との連携による食育の推進

乳幼児期の食育の推進は「食べる」ことや「いのち」への関心、さらに適切な食習慣の形成において大変重要です。そして食に関する家庭との相互理解、さらには地域子育て家庭にむけた食育実践や地域の食文化継承などの視点から、保育所のみならず家庭や地域との連携のもとで実践を進めることが必要となります。

さらに保育所では、自園調理の意義や有用性の確立ならびに、食物アレルギーをもつ子どもへの対応も大きな課題となっています。

本テーマでは、保護者、家庭や地域と連携した食育の実践、食物アレルギーへの対応、食をととした保育実践のあり方などについて研究を深めます。

座長	長崎県	あたご保育園	園長	松尾 肇浩
助言者	長崎県立大学	看護栄養学部栄養健康学科	教授	武藤 慶子 氏
意見発表者	福岡県	古前保育所	調理員	安楽 知子
	佐賀県	永林寺保育園	園長	遙山 典仁
		同朋天神保育園	主任保育士	南 真津美
	長崎県	星座保育園	園長	高實 絢子
		木鉢双葉園	調理員	橋口 涼子
幹事	長崎県	つばさ保育園	園長	毛谷村 裕子
記録	長崎県	かき道ピノキオ保育園	副園長	松尾 正次郎

1. 発表趣旨

(1)『子ども達の健やかな育ちを願って ～地域とのつながりを通して～』

福岡県 古前保育所

現在は食べたいものがすぐに手に入る環境にあり、菓子パンやお惣菜を買って帰るという家庭もあり、食に対する考え方が多様化してきている。このようななか「食を営む力」の

基礎を培う乳幼児期の嗜好が、その後の食習慣に影響を与えている環境のなかでは、保育所の役割は大きい。子ども達の健やかな育ちを願い「食」を通して日々の保育の中で取り組んでいる。

食育の実践は、年間食育予定表を作成し、体験に基づく経験を大切にしている。園での取り組みとして、給食材料の展示、栄養3色群のはたらきボードで伝える（毎日）



給食レシピの発行（４種類）その他、写真ポスターでのレシピ紹介（毎月）を行っている。
また、給食試食会を通して保護者アンケートを実施し、保護者の意向の確認を行っている。

地域交流の取り組みとして、餅つき大会や伝承遊び会を通して交流が活発に行われ、地域に根ざす保育所を目指して、継続した関係を大切に感じている。

誕生日は、給食室からもメッセージカードを送り、ハートの野菜等で特別な日をお祝いしている。そのことで「がんばって野菜食べたよ！」と嬉しそうに給食室まで報告してくれるようになり、家庭でも会話が弾んでいるようだ。

保育所のダシから作るおでんや、昔からある和食献立は、伝えていきたい「大切な味」だと思う。野菜づくり等を通して命あることを学び、保育所全職員の連携のもと、保護者も巻き込んで、本物の味、香り、季節感を五感で感じる食の大切さを伝えていきたい。

（２）『０～２歳児のていねいな食事 ～地区全園で、日々の保育を一步前へ』

佐賀県 永林寺保育園
同朋天神保育園

今回のテーマに至るまでの経緯として、必ずしも特別なことを始めなくて良く、実際のなかで生まれる疑問、葛藤に立ち返り、保育指針の改定の議論のとりまとめにもあるように子どもの心身の発達にとって極めて大切な０～２歳児時期に給食の時間をていねいに見直し、日々の保育が一步深まる取り組みをしようと始めました。

各園の「自分ごと」の課題」が示され、向き合いながら会議や研修の機会を通して振り返り、意見交換する機会を設けた。また、動画や写真を使つての紹介や取り組みがあり、９園９様の取り組みであることから指針に立ち返ることを確認する。

保育指針の基本理念から、保育所は、子どもの最善の利益を考慮し、最もふさわしい生活の場でなければならないことを念頭に置き、実践の紹介が写真等を使ってなされた。



（３）『薄味でうま味と塩分の適正量 ～日本的なだし文化は元気な子どもを育む～』

長崎県 星座保育園
木鉢双葉園

「食することは、人の心を満足させ癒してくれることなのに、給食を意欲的に食べない子ども達が見られるのはなぜだろう」と疑問に思い、本来のうま味を基礎とした日本的なだし文化を給食に取り入れ、調理士、保育士、乳幼児やその保護者とつながりながら、味わい能

力を獲得したいと思い研究した。

まず、基本となるだしを取る際にどのようなものが使われているのか実態を調査した。多い順から、粉だし、煮干し、かつお節、昆布、干し椎茸となった。思った以上に天然だしを多く使っているという結果だったが、複数の素材を使ったり、状況に応じて使い分けしていることがうかがわれた。



官能調査を行うと、うま味には効果的に反応する塩分と温度があることが分かった。また、今回の研究から、嗜好性が高い加工食品に頼らず、時間にゆとりがあるときは、できるだけ家庭で「薄味の中のうま味」を意識して調理することが重要だと気付いた。このことから、日本の伝統的なだしは塩分を控え健康維持につながることを理解することができた。

2. 助言内容

長崎県立大学 看護栄養学部栄養健康学科
教授 武藤 慶子 氏

すべての発表が終わり、長崎県立大学の武藤慶子先生より国から示されている食育推進のガイドライン等の話や、質疑応答がなされた。

保育園での食育推進は、子どもの生きる力を培う上でも大切な取り組みである。だし（うま味）への取り組みは、興味深いものだった。

長崎の地ということもあるので、「あごだし」を取り入れた給食にも取り組んでみたらどうかと先生方の提案もあった。



【カテゴリー3】多様な連携と協働をつくる

子育て不安や児童虐待への対応等、子どもと子育て家庭への支援は、地域社会を基盤として多面的に取り組みを充実していく事が大切です。保育所は、さまざまな機関・組織・団体や住民が連携・協働して地域の保育機能を高めるための中心的存在として、役割を果たします。

◆第6分科会 参加者84名

テーマ 子どものよりよい育ちに向けた関係機関とのネットワーク

子どものより良い育ちにむけ、保育所、小学校さらに中学校との連携は、子ども一人ひとりの成長を連続的にとらえる視点として重要です。

また、都道府県や市町村に保育制度・施策に関する責務が増大する方向性のなか、各地域の保育施策の充実化に向け、保育関係者と各地域の行政機関等との連携や、信頼関係の構築もいっそう大切となります。

さらには、児童虐待予防、病児・病後児保育など、保育所単体のみならず、地域の関係各機関と連携・協働をもってすすめるべき取り組みは多くあります。

本テーマでは、子どものより良い育ちにむけた、多様な機関との連携・協働のすすめ方や保育所が果たすべき役割などについて研究を深めます。

座長	長崎県	菜の花こども園	園長	土井 淳一
助言者	長崎短期大学		副学長	川原 ゆかり 氏
意見発表者	佐賀県	唐房保育園	園長	井手 聖実
	長崎県	恵祥保育園	主任	坪田 裕美子
	熊本県	幼保連携型認定こども園	城山保育園	
			保育教諭	渡邊 寛臣
幹事	長崎県	いけだ保育園	副園長	桑川 優子
記録	長崎県	上長崎保育園	園長	増田 浩一

1. 発表趣旨

(1)『子どものより良い育ちに向けた関係機関とのネットワーク

～子どもの育ちを支える地域とのネットワーク～』

佐賀県 唐房保育園

東日本大震災から保育園単独で地震津波避難訓練を計画実行した。その反省として、避難時間、避難車に子どもを乗せたまま歩道橋を渡るのは男性保育士がいたからできた（休みの日は難しい）、避難経路の見直し、繰り返し訓練の必要性などが出てきた。改善策として、道路を2度横断するが少しでも早く高い所に、避難車の使用方法、車道の横断用に避難ゼッケンを作るなど。第2回、第3回と改善を繰り返し訓練した。避難の短時間化、道路横断、避難車の使用法（避難場所まで持っていくという固定概念を捨てるなど）について、子ども達の姿から避難途中につまづき転ぶ姿が多く、基礎体力作りに加え走る機会を増やすこと、低月齢の1歳児は背負う、など改善を行ってきた。しかし、実際に災害が起こると、階段が崩れるのでは、車は停まるのか等新たな心配が出てきた。また災害が起こるのは在園時だけ

でないことを考えるようになった。

そのような中で、小学校が、防災教育モデル校となり、合同の訓練をすることになった。訓練には、参加者として学校・公民館・民生委員・寺関係者・警察官、園児担当に学校職員2名を付けてもらった。後日、保育園3か園、小中学校、PTA、地区役員、駐在員が集い校区地域防災会議が行われ、反省（道路横断するのは危険、歩道橋や階段が壊れる想定で小学校への避難、非常時の備蓄、一斉メールの登録推進）や、地域の危険箇所、災害時の対応、地区の避難場所等について話した。一斉メールの不着、休校日など課題がでてきた。



訓練を通して、子ども達に自分の身を守るという意識の芽生え、自主性、足腰の強化など、子どもの育ちが見えてきた。この発表は、今後「命を守る保育」を進めていくうえで、再確認する良い機会だった。地区事情、地域環境、自然環境をよく知り、小中学校とのつながり、関係機関との連携の中で、子ども達は育っている。

課題として、合同避難訓練を今後も続けていくこと。一斉メールの登録を全家庭に。短距離で高いところまで避難できるように地域の協力を求める。家族で災害時の共通理解を啓蒙する。さらに、原発事故に伴う対応、以前決壊し土砂崩れしたため池決壊に伴う保育園・小学校への被害など、どのような状況にあってもまず命を守るということを第一に考え、今後も繰り返し訓練を続けていく。

（2）『子どものより良い育ちに向けた関係機関とのネットワーク』

～幼・保・小連携について～

長崎県 恵祥保育園

長崎県島原市にあり、学童保育には隣接する小学校から低学年のほとんどの児童が通う。小学校教諭も時々訪ねて来て情報交換をしている。ここでは小学校との連携を発表する。

入学前には事前に学校との話し合いを設け、配慮してほしいことなどを説明するなどスムーズにボタンタッチできるようにしている。授業参観には卒園児担任と学童の職員とで参観している。1年生の様子や教室の様子も観察するようにしている。学校で開催される春の運動会・七夕学芸会・マラソン大会には園児の出番が設けてあり、地域一体となったような和やかな雰囲気と、小学生からマラソンのご褒美をもらうなどのふれあいもある。1月には学校関係者を招待した「招待給食」があり、園からも職員が参加し、生徒たちと一緒に給食を食べます。担任の先生や子ども達とお話する貴重な機会、子ども達の様子も見るができる。入学体験は年長児が学校へ行き、小学生と一緒に遊んだり、学校の中を探検したりと、学校の様子を少しでも知ることができ、不安解消して入学を心待ちにしている。

学校からの来園として、年長児の英語教室の様子を学校の先生に見学していただき、入学予定の子ども達の様子を少しでもわかってもらえるようにしている。3月には小学生が来園し、催しものを披露してくれる。ダンスや、いくつかのグループに分かれての絵本の読み聞かせ（よく園児たちは聴いていた）をして楽しい交流ができた。

感想として、地域に小学校と保育園が隣接しひとつずつ、様々な機会交流している。園児の減少傾向もあるためさらに交流を深め、また気になる子どももでてきているようなので、小学校・保育園一緒になり伸ばしてあげたい。最後に小学校と色々な情報交換をしていきながら地域の子どものために最善をつくしていきたい。

(3)『繋がりから見えてくる保育 ～専門性を高めるために～』

熊本県 城山保育園

他園より転園したA君が、入園当初から現在までの支援によってどのような成長の勝ち得が見られたかを発表する。その中で関係機関との連携をどのように確立し、ネットワークを築いたかを発表する。

A君については療育手帳を持ち、自閉症の特性がある。療育へ週2回通う。対人コミュニケーションが苦手・言語の遅れ・行動面（衝動的、多動傾向）・情緒不安定である。連携した関係機関（施設等）は、児童発達支援センターB園、学校心理士スーパーバイザーC先生、小学校。

B園と連携を取りながら療育・保育と役割分担をしていくことになったが、①「自閉症」としての園の対応（どこまでが障害なのか）②何を支援・配慮して、何を頑張らせたらよいのか③他の子ども達との関係（集団生活を促すべきか）④保護者の思いが分からない、と園で対応に困るようになった。そこでB園から「A君の状況に応じて…」「少しずつ促して…」「A君の気持ちに寄り添って…」、学校心理士C先生より「A君の特性から集団は不安が強く無理には入れなくてもよい」「遠くからお集まりの様子が分かる場所で好きなことをさせる」などアドバイスを頂き、半年後にはお集まりに参加するようになってきた。学校心理士から教わったこと①職員個人の経験や保育観でA君を判断しないこと②A君の具体的な症状と程度③園としてできること・できないこと（配慮・支援と療育的対応の区別）④成長の見通し⑤保護者の思いと、それに対する園の対応。

具体的な保育方法の検討と見直しや保育・療育（役割分担）の再調整などを行い、さらにA君の保護者に対しての様々な情報提供を行っていった。また平成28年度より熊本市「保育所等訪問支援事業」を保護者の申請により開始、支援員の訪問による直接支援（A君に対する直接的支援とその必要環境についての援助）が始まった。その後就学に向け保護者との就学前面談（家庭からの展望・期待や園での姿）、小学校との連絡会、保育要録を通して連携を図り、就学後の現在も連携を行っているところである。



今回の専門機関とのつながりから見えたものとして①役割分担をすることで、できる6こと、できないことを明確にすることで互いの役割を具体化でき、見通しが持てる②情報共有することで、相互の認識の差がなくなり支援方法の共通化を図ることができる③つながることで保護者支援等のネットワークを充実させることができる。保護者支援の観点からも関係機関とのネットワークを絶やさないことが不可欠である。

2. 助言内容

長崎短期大学 副学長 川原ゆかり 氏

虐待死の事例を挙げ、「一歩前に」常にリスクセンサーを持ち、自分でできることを何かしたい。関係機関のネットワークの留意点。1 園内の情報共有。2 職員の問題意識・資質向上。3 社会資源（関係機関）の制度や役割・機能・使命、限界を知ることが大切。4 つながるときには具体的につながる。5 保育園と関係機関の「際」を埋める。そこまでしなくていいか、できないか。できない理由を探すよりも、結果としてできないというのは全く似て非なるものです。

【カテゴリー4】子育て文化を育む

子どもを対象とした犯罪や虐待の増加など、子ども達をめぐる深刻な課題が増えています。次世代を創造する子どもをかけがえのない存在として愛しみ、価値を認め、子どもや子育てに多くの人が関心を持ち、私たちの未来を創造していく子ども達を社会全体で育んでいく子育て文化を、保育所が拠点となって地域社会に発信していきます。

◆第7分科会 参加者109名

テーマ 保育の社会化に向けて～保育の営みをいかに社会に発信するか～

少子化や核家族化が進むなか、社会における人と人、とくに子どもと大人が繋がる場面が少なくなりつつあり、社会における子ども・子育てへの関心低下に繋がっています。

こうしたなか、子育て家庭や保育関係者に限らず、すべての人が子どもや子育てに関心を持つ取り組みが、安心して子どもを産み育てることができる社会づくりに向けて大切です。

本テーマでは、保育所の地域に向けた諸活動の展開により、広く地域や国民に対して子ども・子育て家庭への関心や保育の営みの重要性を発信し、地域全体で子育てを考えていく取り組みについて、研究を深めます。

座 長	長崎県	みのり保育園	園長	西村 承品
助言者	長崎短期大学		学長	安部 恵美子 氏
意見発表者	長崎県	横瀬保育所	保育士	中村 有史
	熊本県	大道保育園	主任保育士	隈部 純子
			栄養士	上村 真紀子
	鹿児島県	小宿保育園	主任保育士	豊 さつき
幹 事	長崎県	住吉こども園	園長	金内 俊哉
記 録	長崎県	やまだこども園	園長	明時 千枝子

1. 発表趣旨

(1)『保育の社会化に向けて ～保育の営みをいかに地域に発信していくか～』

長崎県 横瀬保育所

【研究の動機・ねらい】

職員、保護者、地域の方々にアンケート調査を行い移り変わる地域のなかで「保育所に求められるものは何か」「今後どのように保育を展開・発信していくべきか」をねらいとする

【研究内容】

「保育所に求められるものは何か」をテーマに保護者、地域、職員に意識調査としてアンケートを実施する。

アンケート内容

(保護者)

- ・皆さんが思われる保育所とはどんなところだと思うか。
- ・保育所の理念や方針を知っているか。その理念や方針に基づいた保育がされているか。
- ・保育所の様子がわかりやすく伝わっているか。(園だより、クラスだより等)

(地域)

- ・保育所に来られたことがあるか。また気軽に尋ねることができるか。
- ・保育所の様子が地域の方々の届いているか
- ・これからの目標に何を求めるか。

【結果及び考察】

アンケート結果（発信について）

- 保護者
- ・連絡帳やクラスだより、園だよりを通して園の様子が伝わる
 - ・行事に参加することで家庭内の会話が増えた
 - ・行事に参加したいが忙しくて参加できない。園だより、クラスだよりを、もっと工夫してほしい。
- 地域
- ・園の立地条件が良く外部からよく園の様子を発信する。
 - ・訪ねてみたいが訪問する機会がない

今後の取り組み方

- ・ホームページや広報誌、ポスター等を活用して園の様子を発信していきたい。
- ・保育サービスの向上にさらに努め地域に向けて保育を発信していきたい。
- ・商業施設、公共施設での園だよりの掲示を行う。
- ・お便りの内容を工夫する

(2)『～心を添える～』

熊本県 大道保育園

【研究の動機・ねらい】

入園する子どもや家庭だけでなく地域の子どもや子育て家庭を支援する役割を持つ社会資源として情報が来るのをただ待っているだけでいいのだろうか、もっと保育園の専門性を生かし担うべき役割があるのではないかと考え、地域支援担当として地域の子育て家庭を支援していこうと目標をたてた。

【研究内容】

地域活動支援委員の取り組み

- ・2名が担当し園外に出向く
区長、民生委員、子育て支援センター、
子育てサロン、子ども相談室等
- ・「メアリーさんとの出会い」
海外の方で、近所付き合いが殆どない方で同じ園から来られた保護者の方を紹介。
同じアパートに住む園の保護者を紹介し、
つながりを広めた
- ・「山崎さんとの出会い」
子育て支援センターさんより紹介され、近くに両親や知り合いがいない方で何度か訪問し行事に誘ったが、当日来られなかったので心配する→後日第2子でつわりがひどく来られなかった。
- ・「おりひめ day」（離乳食試食会）



離乳食の進め方がわからない、離乳食をレトルトに頼り行き詰っている不安を解消してあげたい。離乳食の試食会を実施し味付けや硬さなどの質問を受けた。

【結果及び考察】

- ・離乳食試食会の活動をまとめ子育て支援センター等に貼る。利用者が一緒にお便りを読み離乳食談義に花が咲く。改めて悩みながら離乳食を進めていられる。
- ・地域支援担当として地域を廻り保育園だけでは見えない子育ての現状が見えてきた。
- ・地域の子育て中の保護者に蓄積された子育て力を具体的に伝える場として「おりひめday」の充実を図りたい。
- ・「子どもには愛と夢を子育てにぬくもりと力を」の理念に基づきしっかりと心を添えて頑張りたい。

(3)『子どもの育ちを保障する ～子どもの自己肯定感を育てる ほめる保育、教育の実践～』

鹿児島県 小宿保育園

【研究動機・ねらい】

「ほめる保育・教育のすすめ」の実践としての「よい子の表彰」と「お誕生日リボン」。
子ども達はみんなから守られ認められることから安心感、信頼感が生まれ自己肯定感、自尊心を育て、自主的・意欲的生活の源泉だということを保護者や家族に発信したい。

【研究内容】

☆よい子の表彰—できるようになったこと発達過程の様子、目標を達成した時、友達との
↓
触れ合いを通して育まれる心の成長⇒文章化して表彰「よい子の表彰」
「人間性を伸ばす教育」に通じる⇒家庭でも親子でも夫婦間でも大いにほめよう。
☆お誕生日リボン⇒終日園内でリボンをつけて過ごす。それが目印になりリボンに気付いた友達、職員、保護者等いろんな人から「おめでとう」と声をかけてもらってみんなで一緒にお祝いをしようとする取り組み。
↓
「自分は愛されている」「自分は大切な存在だ」という自己肯定感を感じてもらいたい。

【結果及び考察】

☆よい子の表彰（こども）—こども同士でもよいところを見つけ良い刺激になっている。
（保育士）—子どもの良さをを見つける感覚を養う。結果だけでなく家庭もほめる。子どものほめ方について学習する。
☆お誕生日リボン→・リボンをもらえることで自分の誕生日を心待ちにしている。

- ・友達の誕生日の意識が高まる。
数字がわかり誕生表を見てもうすぐ誕生日の子に声をかける。
- ・誕生日という言葉の理解から小さい命に対する愛情や優しい気持ちが育ってきたように感じる。



2. 助言（保育の社会化に向けて）

長崎短期大学 学長 安部 恵美子

◎問題提起

- ・現代の社会は子育てに関して負の側面や負の負担感を強調しすぎていないか？
「子育ては大変だ大変だ」と言い過ぎていないか
- ・伝えて欲しい「保育の楽しさ」
子育ての楽しさ喜びを送らなければいけないと思う→保育園はその思いを伝えなければいけない。
- ・3つの保育園の発表から「保育の社会化」の実践とは
 - ①横瀬保育所→・保護者や地域の保育所へのイメージや期待を探る。
私たちに何を期待しているのかを探る
 - ②大道保育園→・保育園の外での積極的な発信
・地域の子育て支援の関係者との交流・連携
どこに行けばどんな悩みを持った人と関われるか、子育て支援の必要なニーズを探ることができる。
 - ③小宿保育園→・継続的自園保育の質向上
自分の園にプライドを持ち長年に渡り継続している。

※保護者やまわりに地域の方々から「あの園にやってよかった」と思ってもらえるようにならなければいけない。また自園の味方を増やすことが社会化。

◎「保育の社会化」の実践の成果

①保育園にとって

- ・地域における自園のブランド力の向上→地域の方から信頼を得る。
- ・地域と保育園の間の垣根の低下→地域の中で保育園の存在を認めてもらう。
- ・多様な外部者の受け入れによる自園応援団の形成
⇒応援して下さる方がどれだけいるか、社会に発信することで応援団を増やす。

②保育者にとって

- ・保育業務に関する視野の拡大
- ・保育の振り返りによる保育力の向上
- ・コミュニケーション力と調整力の向上

自分の園を社会に発信する為には
振りかえり反省をすることが大切。



◎おわりに（子育てには問題が山積み！）

それでも子育ては、未来を創造することであり、その楽しみ・喜びを一番知っている保育園・保育者は地域に希望を与える「子育て文化」の発信元である。

【カテゴリー 5】子育て・子育てを支援する仕組みをつくる

わが国の家族関係の給付の GDP に占める割合は、0.81%と諸外国のなかでもとても低い水準です。こうした環境を改善するとともに、日本の未来の社会を担う子どもを中心において、子ども達が豊かに育つ環境を社会全体が支えていく仕組みについて研究・提言します。

◆第 8 分科会 参加者 50 名

テーマ 公立保育所の使命と地域社会での役割

保育・子育て支援の今日的な流れにおいては、都道府県や市町村に保育制度・施策に関する責務が増大する方向性であり、保育の質やその実践において地域間格差が進むことが懸念されます。

本テーマでは、地域全体の保育の質の向上に向けた、公立保育所の意義や役割意識の普及、保育行政機関でもある公立保育所の特性を活かした具体的実践のあり方などについて、研究を深めます。

座 長	長崎県	中央保育所	所長	山下 明美
助言者	長崎大学	教育学部人間発達講座	准教授	脇 信明 氏
意見発表者	熊本県	山鹿保育園	保育士	田代 優子
	宮崎県	細田児童館	所長	吉川 ひとみ
	鹿児島県	花尾保育所	保育士	吉村 美智子
幹 事	長崎県	緑ヶ丘保育所	所長	村元 靖子
記 録	長崎県	春日幼児園	園長	山口 裕理子

1. 発表要旨

(1)『インクルーシブ保育の実践をめざして』

熊本県 山鹿保育園

近年、特別な支援が必要な子どもが増加傾向にあります。山鹿市は平成 26 年度に国の補助を受けて、専門的な立場から指導方法や協力体制の構築等のアドバイスを受けることにより保育士のスキルアップが図られ、子どもが同一の方向性を持った質の変わらない支援を受けることができる「子そだて・子そだちスクラム事業」に取り組んでおり、当園はモデル園となり 4 年目を迎えています。「インクルーシブ保育」の実践をめざし率先して取り組んでいくことが公立保育園の使命であり地域社会の役割のひとつと考えます。支援の必要な園児への個別的な取り組みとして、その子の長所を取り上げていく「かがやきプラン」や「個別の保育支援計画」の作成や、ストラテジーシートを活用し苦手なところを細かく分析して次の支援の具体的な手立てを考え工夫していくことで、子ども一人ひとりが自分らしさを発揮できるより良い育ちにつながるということがわかりました。次に障がい児をもつ保護者との共通理解を目的に「おしゃべり会」を始めましたが、療育、就学への不安を話し合う場となり保護者同士のつながりができたと喜ばれています。また専門員の方と一緒に、園内保育参観や園内研修を行うことで、職員の資質向上、意識の高まりにも繋がりましたが、この

ような取り組みを他の保護者の方へ発信できていないという課題にも気づかされ、今年度は保育参観後に専門員の方による講演会を行っております。

その子のあるがままを受け止め、心に寄り添い共感し、一人ひとりにとって居心地のいい園を目指し、さらに他の保育園・幼稚園や関係機関との連携を図り、公私立合同のコーディネーター会議の実施や公開保育、研修会、実践集の作成などに取り組み、山鹿市全体の「インクルーシブ保育」の実践を深め確かなものにすることが公立保育園としての役割だと感じています。



（２）『公立保育所、公立認定こども園などの地域社会での役割』

宮崎県 細田児童館

今、子ども達の育つ環境は複雑になり、保護者の育児能力の低下、貧困などが大きな問題となり、核家族で育つ子ども達が大半で、子育て支援が求められています。2か所の公立保育所と児童館では、公民館のお年寄りのサロンや介護老人保健施設へ出向いたり、地区の方が来られ三味線等の演奏や正月遊びを楽しんだり、地域の農家や商店などへ行き話を聞いたり、いろいろな交流を行っています。小学校との交流では、地域の方と行事に参加をしたり、小学生が伝承遊びにきてくれたり交流が盛んです。園児数が少ないため3園合同で交流保育も行っています。

北郷認定子ども園は小学校に隣接しており幼小中一貫教育として、授業で絵本の読み聞かせや、夏休みに小中学校の先生が保育研修に訪問し、様々な交流を行うことができます。

今年3月まで運営していたつどいの広場「きらきら」で行っていた子育て支援を4月に移行した子育て支援センター「ことこと」に引き継がれ、ベビーマッサージや国際交流員による「英語であそぼ」も行っています。日南市は、幼少期から木と触れ合う取り組み「ウッドスタート宣言」をしており、オープンまで1年半かけたワークショップでは、^{おびすぎ} 飢肥杉をふんだんに取り入れるため製材所見学やおもちゃ作り体験、福祉施設での作業体験等を行いました。今年4月にオープンしたセンターには寄贈された飢肥杉の香りがいっぱいのおもちゃが設置してあり、子ども達の五感に刺激を与えます。

また子ども課の保育士は、4か月のすべての乳児を対象として、保健師、主任児童委員とともに、全戸訪問をするこんにちは赤ちゃん事業に取り組んでいます。ニコニコサポート事業では、ペアレントトレーナーの資格も持った特別支援コーディネーターが公立・民間の保育施設を訪問し発達障害児の支援などを行う4歳児フォローアップ訪問、カンファレンス、子育て教室など、公でなくては出来ない子育て支援事業をしています。保育所は地域との交流で親しみを持ってもらえ、子ども達は交流の中であこがれや思いやりの気持ちが育まれます。支援センターや子ども課の保育士は、保育所ではできない在宅の子ども達や子育て中の保護者支援、民間保育施設への指導、支援をしています。保育現場でのスキルアップが子育て支援のベースでありますので、公立の現場の灯が消えないようにと強く願っておりますが、地域全体への支援が求められているいろいろな子育て支援をしていくことが地域に根差す公立保育所、公立の保育士の使命と思っております。

(3)『小学校との交流をとおして ～またおいで！まってね！～』

鹿児島県 花尾保育所

鹿児島市の北西端、周縁部に位置し高齢化が著しい地区で、近隣の小学校は児童が減少傾向にあります。

小世帯ゆえの強みを生かし、小学校との連携を深め、就学への不安を取り除き、学校生活に期待を持たせていきたいと、4年前から地域性を活かした交流活動に取り組んでいます。「保育所の子どもは地域の宝」と小学校で行われている老人会との交流会に声をかけていただき昔遊びに参加した際、コツをつかんだ小学生が園児に教えてくれたり、次の交流会の約束をしたりしました。地域の方が管理されている学校農園での芋ほりや、地域の文化祭を兼ねた学習発表会への参加、収穫感謝祭では芋の天ぷらづくりやもちつきを小学生と一緒にいき、腕相撲大会へと発展しました。授業参観、給食試食会、高学年児童の出張保育など交流の機会があり、仲良くなった児童との交流を楽しむことができました。

年4回保幼小が集う連絡会で、保育参観、授業参観、意見交換会の他、アプローチ・スタートカリキュラムの見直しなどを地域全体で行っています。小保連携年間カリキュラムを作成しそれに沿って連携を行い課題も出てきたため「就学前チェックアンケート」を保護者へ配布しました。今後も保護者と意思統一を図りながら生活習慣を見直していきたいと思っています。

小学生との交流を通して、交流を心待ちにしている年長児の姿を見ることができ、就学した子ども達の様子から早めに園生活に取り入れ対策を練ることができました。今後は地域と協力し合いながら、近隣の幼稚園・保育所との園児同士の交流を広げ、他の小学校へ就学する子ども達の不安を減らしていきたいと思っています。

2. 討議内容

(1) 質疑応答

*山鹿保育園

Q:「かがやきプラン」の作成をする時間や、公開保育等をするにあたってのクラスの職員配置など、どのようにされていますか？

A:作成する時間は保育時間内にできればいいのですが、メモを取るぐらいしかできず、持ち帰って書いています。公開保育の時間は、複数担任制ですので、一人抜けたクラスへ園長先生や代替保育士が入ったり合同保育をしたりしています。

Q:公私立のコーディネーター会議の内容や委員の方々を教えてください。

A:公私立は今後行っていきたいので、今年は公立だけで始めています。コーディネーター会議の当日、公開保育を行い、午後から情報交換や討論会を行っています。療育関係の専門員の方の意見もあります。委員の方は各園の主任保育士、担当者等です。専門的な研修を受けていますが、特別な資格を持った方はいません。

Q:地域社会への果たす役割として、地域での会議で共通の課題を認識し、公立保育所が率先して取り組んでいるという理解でよろしいのでしょうか。私立や地域のご家庭の方へ発信の仕方を今後、段階的に構築していくという認識でよろしいでしょうか。計画等の舵取りや方向性は誰がしていくのでしょうか。保護者の「おしゃべり会」の工夫はどのようにされていますか。

A:舵取りは市の子ども課がしています。「おしゃべり会」は全体に呼びかけています。お母さん同士の口コミも多いです。「参加してよかった」という感想がネットワーク等を通じ広がっています。

＊日南市立細田児童館

Q:市が作られた施設ということですが、運営をしているのは公立の保育士さん達ですか。

A:行政が中心地活性化事業で複合ビルの中に子育て支援センターを入れることで補助が出たので出来た施設。子ども課の公立の保育士2名が中心になって計画もしておりとても大変でした。オープンして利用者がとても多く好評ですが、土日も開館しているため、職員側としては大変です。

(2) グループ討議

討議の柱

- ① インクルーシブ保育等、保育を充実するための取り組みと地域の他園や諸機関との連携のあり方
- ② 公立保育園としての「特色」とは何か、その取り組みのあり方とは
- ③ 公立保育園としての「小学校との連携・接続」をどのように行うか

3. 助言内容

長崎大学 教育学部人間発達講座 准教授 脇 信明 氏

人口減少問題や地域の拠点となる複合型施設での連携、地域・小学校との連携など問題提起がたくさんありました。実践を記録し分析し次の保育へ活かしていく専門性や、丁寧な小学校との連携・接続、地域の専門機関・親同士のコーディネーターとしての役割など、豊かな保育を行っていくことが今の公立保育に求められています。「保育園がなくなることとはその地域が死んでいくこと」とも言われています。地域の中で丁寧にかかわり大切に育てられた子ども達が成長し、その地域の産業・経済を活性化し地域の存続に繋がります。人口が少なくなっている中、公立の存在意義が問われているのです。

公立保育所の3つの強みとして、①障害児保育への取り組み、②未満児保育への取り組み③地域子育て支援への取り組みがあげられます。保育の基本的な取り組みが充実していることと、豊かな保育経験者による安定した安心の保育がベースにあるからです。

そして公立保育所の意義とは、まず憲法や児童福祉法など日本の「児童福祉」理念の体现であり子どもの権利保障の礎です。次に公立保育所の保育は、その自治体の保育のスタンダード（基準）であり代表です。意識をしっかりと持っていきたいと思っています。そして全ての保育労働者の「勤務待遇の標準」の役割を担っています。経済原理（経営状態）に振り回されない保育の実施が可能であり、その地域に必要な保育を純粋に実行できる強みがあります。行政機関の一機関としての役割もあるため、行政と一体化し地域の状況を吸い上げやすい点や利用者の声を保育行政に反映することができ温かい福祉従事者としての使命と役割があります。また地域のネットワークの要として、地域の専門的施設やサービスとのハブ的役割とケアワークとソーシャルワークの両立の可能性があります。地域のセーフティーネットとしての役割もあり、

貧困・虐待・障がい児の受け皿としての役割や、厳しい家庭状態の親子が最後に助かることができる場所です。一人ひとりが公立保育士であることを自覚し地道に行っていくことが、地域に愛され信頼され公立保育園の大切さを理解してもらい公的保育の存続につながると思います。



◆特別分科会 参加者 348名

テーマ これからの保育の在り方について

座 長	長崎県 春陽保育園	園長	原田 恒
パネラー	参議院議員 前少子化対策担当大臣		ありむら治子 氏
	全国保育協議会	会長	万田 康 氏
	大阪総合保育大学	教授	大方 美香 氏
	(社福) いしづえ会	理事	城戸 久夫 氏
幹 事	長崎県 かいぜ保育園	園長	崎田 博彦
	長崎県 いちご西保育園	園長	森 恵律子
記 録	長崎県 時津中央保育園	園長	井手 創三郎

1. 講義内容

(1)『これからの保育の在り方について』

全国保育協議会 会長 万田 康 氏

2017年の骨太方針で待機児童の解消と人材確保が盛り込まれた。

今後の少子化は避けて通れないが、現状の制度である処遇改善や退職共済は維持していき



たい。また、企業主導型保育事業にある地域枠の設置は、どんな影響があるのかを注視していきたい。社会福祉法人制度改革では評議員の設置など、非課税に相応しいのかが問われていると思う。

全国保育協議会としては保育所やこども園の施設長に求められる要件に対する意見集約も検討している。また公定価格試算表示システムの改訂作業や被災地における保育への継続的な支援も引き続き行っていきたい。

(2)『保育所保育指針改定による組織のあり方について』

大阪総合保育大学 教授 大方 美香 氏

第1章に「幼児教育を行う施設」と明記された。保育所でも教育を行っていることの証明だと思う。

第3章に「災害への備え」と明記されたので。各施設での対応が不可欠となってきた。

第4章に「子育て支援」と明記された。10年前までは「保護者支援」と明記されていたが、これからは「子育て世帯の支援」と捉えて、地域で行っている子育てを支援することになる。

第5章に「職員の資質の向上」と明記され、具体的に位置づけがなされた。

発達過程は人間が育っていく道程であり、今回の改定は成長全体を見据えた改革である。保育園、小学校、中学校、高校、大学までボトムアップしてほしい。

S N S などの普及で子どもが対話を出来なくなってきた。買い物もネットで注文するようになったし、人手不足から業務の簡素化され、出会いが少なくなって、状況が違う場面に遭遇しなくなり、適応能力がなくなってきた。喋りたくなるシチュエーションが少ないとも言える。子どもは大人が喋る場面を見なくなった。(サザエさん家族がなくなった)

いままでの教育のなかでは「知識・技能」の分野が特化していた。「学びに向かう力・人間性等」や「思考力・判断力・表現力等」が不足していた。これからは不足していた分野を育成して欲しい。

平成30年問題は保育所ばかりではなく大学も影響があると考えている。生き残れるには最後は「質」だと思う。保育の内容を説明することも大事だし、目指す子ども像の確認も必要だと思う。出会った大人の中で、違うタイプの人間と会うチャンス。出会わないと物の捉え方や考え方が偏る。そう考えると子育ても大切な時期で種まきの時期と言える。

保育園での生活が長時間だし生活全体が大事なので「養護」という言葉が残った。いま、問われているのは保育の中で変わるモノと変わらないモノの中で、何を残すのかだと思う。時代の変わり目、見極めも大事だと思う。

(3)『少子化担当大臣を担って』

参議院議員比例代表(全国区)・前少子化対策担当大臣
ありむら 治子 氏

少子化対策担当の初代大臣になって「マタニティマーク」の普及や「子どもを授かる」という言葉を広める活動を行った。これからは保育の「量」の拡充も行わなければならないし、保育の「質」の向上も必要。歯科医手当の検討も行っている。保育士の経験年数に児童クラブの経験年数に反映させたい。

今後の人口は2040年には100万人が減少すると言われている。保育園には少子化や公定価格の調整などの懸念材料もあるが、オリンピック、パラリンピックの後も持続可能な経営を目指してもらいたい。今現在、消費税が10%になってからの財源分も予算に計上され、処遇改善なども実施されている。今後、少子化による人数調整があることも検討して欲しい。

経営的に「何で勝負するか」を明確にして、すべてを「言語化」する必要があると思う。そして「共有」することが大切になってくると思う。どうやって生き残るのか、どんな付加価値を提供できるのかを考える時期が来ると思う。

保育園を「サービス」と呼ぶのはやめたい。貨幣経済の言葉である。「延長保育サービス」ではなく「延長保育事業」が正しいと思う。

2. パネルディスカッション

テーマ(1)「保育所職員処遇改善Ⅱについて」

(ありむら氏) 制度創設の背景には職員の方のキャリア形成を目標としている。保育分野は経験がものをいう分野と考える。例えば感染症の対応、アナフィラキシ

一、虐待など専門性が問われる分野と考える。親への対応、DVなどなども同じ。練度、とっさの判断も必要と思う。17年の経験なのか、1年の17回の経験なのか、違いが出てくると思う。

(万田氏) 処遇改善の内容は理解しているが現場サイドとしては使い勝手を良くしてほしい。



テーマ（２）「保育所保育指針について」

(城戸氏) 教育の二元提言がされている状態に見える。保育の中に養護と教育があるのが理想。これまでも保育の中にも教育はあった。自分と違った意見があることを知る機会も大事。遊びの中に生活がある。

(大方氏) 新しくなったことはなく、繋がりが出来たと思う。園の特色や良さを出して選んでもらうことになると思う。人間教育を行うのが保育園の役割になってきたと思うので、これからは専門性を問われてくると思う。

テーマ（３）「現行保育制度の課題について」

(ありむら氏) 少子化は避けて通れない。人は何故、組織化するのもかも検討して、みんなで具体化してほしい。九州方式、九州案を出してほしい。

(城戸氏) 入園児が6名で経営できるような、定員定額制度をお願いしたい。子どもが育てば地域が育つ。病院、学校も一緒だと思う。

(万田氏) 公定価格や退職共済を現状維持していきたい。

(ありむら氏) 公定価格と退職共済の維持は賛同する。公益性、公共性を堅持してもらいたい。集団生活で、学ぶことが多いと考える。

3. 質疑応答

Q1、人口減少地域への対応を検討してほしい。

A、(ありむら氏) 離島振興法などによって進めている。

Q2、JISマークのような保育マークが出来ると聞いた。

A、(万田氏) 聞いてない



Q3、保育士不足の対策と、加算を増やしてほしいと思っている。

A、(ありむら氏)

制度を作っていくなかで、現場の知恵が欲しい。保育士の子どもの入園を優先したいと思っている。処遇改善も継続していきたい。

1. 記念講演&記念演奏

講師 活水女子大学音楽学部 特任教授 藤重 佳久 氏

演題 『音楽は楽しく』

演奏 活水中学校・活水高等学校 吹奏楽部

講演は拍手の練習から始まりました。音楽界では「最高に感動したよ」という表現がスタンディングオベーションなのです。

音楽は楽しい。皆さんはいかがですか？ピアノをやっていた方、その中でやめた方。音楽の指導は大変だと思っている方。私自身も音楽を指導していて、何がいけないのだろうと悩んでいる。最近少しわかったのが「自分が楽しめていないんだ」「自分が楽しんでいないと、音楽は伝わらない」ということです。手拍子してみてください。楽しい曲の手拍子、私はこうします。教科書には載っていないですよ。

リズムを学ぶのは「歩く」のが一番簡単です。音に合わせて歩く。分かりやすい指導法です。さらに拍子を付けてみる、四拍子、三拍子、二拍子。体で拍子を感じると音楽はわかりやすいです。

一番大事なことは楽譜を演奏するのではなくて「音楽から何を伝えたいかということ、子ども達自身が感じる事」だといつも思っています。「ピアノ」は「小さい」、「フォルテ」は「大きい」とよく言

われているが、私は学生にこう伝えています。「ピアノ」は「優しさ」、「メゾピアノ」は「やわらかさ」、「メゾフォルテ」は「豊かさ」、「フォルテ」は「輝かしく、華やか」そして「ピアノッシモ」は「静けさ」。気持ちが全然違ってくる。音楽はイメージによって、演奏によっていくらでも変わる。だから音楽って面白いですね！一人ひとり違う。音楽に答えはないですね。音楽を自己表現として扱って頂ければいいのではないのでしょうか。表現のもとになる心が大切です。音楽には喜怒哀楽があります。音楽ってドラマティックでないと面白くありません。たった1つの音でも表現はいくらでもあります。最後にひとつ覚えて下さい。「笑顔は心のビタミン！」叱り飛ばしての指導はやめました。ほめて笑って認めて励ます。練習は楽しく。「人間にとって大切なことは、愛だけです！」これは人を大切にすることです。この人を大切に思いやりや優しさ、これが実は音楽のもとなのです。

以上のように藤重先生の熱く語って頂いた内容と、前後でのブラスバンド演奏・ダンス、マーチングをする吹奏楽部の皆さんの表現から音楽って楽しいのだと心から思える講演となりました。もちろん最後はスタンディングオベーションでした。



2. 総会

- (1) 議長団選出
- (2) 議長団あいさつ
- (3) 第3回九州保育三団体研究大会報告
(北九州市)
- (4) 分科会報告
- (5) 大会宣言(案)
- (6) 次期開催地あいさつ(熊本市)
- (7) 九州保育三団体協議会旗引継ぎ



(議長団あいさつ)



(前回大会報告)



(分科会報告)



(九州保育三団体協議会旗引き継ぎ)



(次期開催地あいさつ・熊本市)

3. 閉会式

大会宣言

「すべての人が子どもと子育てに関わりをもつ社会の実現をめざして」を大会テーマとして、ここ長崎において第4回九州保育三団体研究大会を開催しました。

子どもを取り巻く環境が大きく変化する中、九州各県から1,600名を超える保育関係者が集い、研修を通じ保育を深め、熱き討議が繰り広げられました。

子ども・子育て支援新制度も2年余りが経過し、今年は新たな保育所保育指針や幼保連携型認定こども園教育・保育要領の告示化、また社会福祉法の改正施行や、保育士の資質向上を求めるキャリアパスの仕組みとしての副主任保育士設置等、目まぐるしく状況が変化しています。そのような中、私たちは、保育の「質の向上」のみならず「量的拡充」という社会のニーズに応えるため保育に一意専心の心構えで励み、一億総活躍社会の実現への一翼を担っているところです。

これまでも、九州保育三団体協議会は、子どもの育ちを守るため、そして地域に根差した児童福祉の拠点である保育施設等を守るために、『九州はひとつ』を合言葉に国や様々な関係機関に対し要望活動を行い、児童福祉法第24条を護ることが出来ました。また、保育の質向上を図り、保育士等の処遇改善や加算要件の一部改善等、一定の成果を上げているところです。

しかしながら、保育に係わる環境や条件の地域格差や施設類型による加算要件の格差等、保育施設等の運営矛盾が生じています。また、都市・地方に関わらず人材確保の問題や更なる処遇改善の問題、また、それらを包括する「量的拡充」と「質の向上」を実現するための財源の確保等、まだまだ課題は山積しています。これからも、これまで以上に「全ての子どもたちの最善の利益と育ちを保障する」ことを保育の根幹として、よりいっそう活動していくことが私たちの使命と認識しています。

本大会を契機とし、九州保育三団体協議会に関わる保育者全員が連帯し、保育の質の向上を図ると共に、地域社会との連携を強め、社会全体ですべての子どもを育て、守り、等しく健全なる発達が保障されるような保育文化を紡ぎだすことを目指し、全国に発信し努力邁進していくことを宣言します。

平成29年7月21日

第4回九州保育三団体研究大会参加者一同